

甲斐市文化財調査報告書 第9集

(山 梨 県)

# 未 法 遺 跡 IV

宅地造成工事に伴う古墳時代・奈良時代遺跡の調査報告書

2007

株式会社ディー・プラン

甲斐市教育委員会

甲斐市文化財調査報告書 第9集  
(山 梨 県)

# 未 法 遺 跡 IV

宅地造成工事に伴う古墳時代・奈良時代遺跡の調査報告書

2007

株式会社ディー・プラン

甲斐市教育委員会

## 序 文

今回の発掘調査では、古墳時代を中心とした住居跡などが発見されました。周辺では、県指定史跡の中森塚古墳を代表とした赤坂台の古墳群や、古墳時代から平安時代の大集落松ノ尾遺跡などが広がっています。また、昨年度は松ノ尾遺跡第13次発掘調査が行なわれており、この地域では人々が連綿と生活を営んできた事がわかります。

甲斐市では近年、人口の増加に伴い、宅地造成や大型店舗の進出によって、開発が盛んに行われております。教育委員会としましては、そういった開発に伴って失われてしまう埋蔵文化財を調査し、記録保存という形で保護していかなければなりません。

末法遺跡第4次調査は、宅地造成に伴って行われる、道路拡幅工事を原因とする緊急発掘調査であり、その調査結果を報告するものであります。

今後は、甲斐市の文化遺産としてこの資料を活用し、また保護・普及に勤めていくことが、私どもの役目と考えております。

最後に、甲斐市の文化財保護に対し、ご理解とご協力賜りました株式会社ディー・プランに対し、深く感謝申し上げます。 ■

平成19年3月

甲斐市教育委員会

教育長 中 込 豊 弘

## 例 言

1. 本書は山梨県甲斐市大下条399-1外に所在する末法遺跡の第4次調査をまとめた発掘調査報告書である。

2. 本調査は株式会社ディー・プランによる宅地造成に伴い実施され、調査面積は約150㎡である。

3. 各調査は甲斐市教育委員会によって実施され、調査期間は次のとおりである。

試掘調査	平成18年3月13日～3月16日
発掘調査	平成18年4月13日～5月2日
整理分析調査	平成18年5月15日～平成19年3月1日

4. 調査組織は次のとおりである。

調査主体者	甲斐市教育委員会
調査担当者	大 嶋 正 之 (甲斐市教育委員会生涯学習文化課) 須 長 愛 子 (甲斐市教育委員会生涯学習文化課)
調査事務局	甲斐市教育委員会生涯学習文化課

5. 本書の執筆、編集は大嶋正之、須長愛子が担当した。執筆分担は第1章、第2章を須長、第3章が大嶋である。遺構写真は、大嶋、須長、遺物は大嶋が撮影した。整理分析調査における実測、トレース図版作成は大嶋、須長の指示のもとに小林明美、内藤えみ子が行った。

6. 調査に係る費用は、株式会社ディー・プランが負担した。

7. 調査にあたり山下孝司氏(韮崎市教育委員会)、保坂和博氏(山梨県教育委員会)、小林健二氏(山梨県立考古博物館)よりご教示いただいた。ご芳名を記してお礼申し上げます。

8. 発掘調査ならびに整理分析調査作業参加者

石川弘美、長田由美子、小林明美、高添美智子、堀 吉彦、内藤えみ子、保延 勇、望月典子  
森沢篤美(甲斐市文化財調査協力員)

9. 本調査における出土遺物及び記録図面、写真などの資料は一括して甲斐市教育委員会に保管してある。

## 凡 例

1. 住居跡・溝跡・土坑跡・落ち込み跡は1/40、ビット配置図は1/80、土器・石製品は1/3、ミニチュア土器は1/2で記載した。

2. 出土遺物観察表の計測値のうち、( )内の数値は推定を表し、残部の計測は数字の頭に「残」を記した。

3. 遺物挿入中  は内黒を表し、 は赤彩を表す。

# 本文目次

序文

例言・凡例

目次

第1章 遺跡をとりまく環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 周辺遺跡と遺跡の概要	1
第2章 遺構と遺物	
第1節 調査方法と遺構	5
第2節 基本層位	5
第3節 住居跡	5
第4節 溝跡	11
第5節 土坑跡	12
第6節 落ち込み跡	13
第7節 ビット	13
第8節 遺構外出土遺物	15
第3章 まとめ	16

# 挿図目次

第1図 未法遺跡と周辺の遺跡	2
第2図 調査区位置図	3
第3図 調査区全体図	4
第4図 基本層位	5
第5図 第1号住居跡	6
第6図 第1号住居跡出土遺物	7
第7図 第2・3号住居跡・出土遺物	8
第8図 第4号住居跡出土遺物	9
第9図 第4号住居跡	10
第10図 第5号住居跡・出土遺物	11
第11図 溝跡	12
第12図 土坑跡	12
第13図 落ち込み跡・出土遺物	13
第14図 ビット配置図	14
第15図 遺構外出土遺物	15

# 表 目 次

第1表	第1号住居跡出土遺物観察表	7
第2表	第3号住居跡出土遺物観察表	8
第3表	第4号住居跡出土遺物観察表	11
第4表	第5号住居跡出土遺物観察表	11
第5表	落ち込み跡出土遺物観察表	13
第6表	ピット一覧表	13
第7表	遺構外出土遺物観察表	15

# 図 版 目 次

図版1-1	北側調査区全景
図版1-2	南側調査区全景
図版1-3	第1号住居跡
図版1-4	第1号住居跡遺物出土状況
図版1-5	第2・3号住居跡
図版1-6	第4号住居跡
図版2-1	第4号住居跡遺物出土状況
図版2-2	第4号住居跡遺物出土状況
図版2-3	第5号住居跡
図版2-4	溝跡
図版2-5	上坑跡
図版2-6	落ち込み跡
図版2-7	落ち込み跡遺物出土状況
図版2-8	ピット全景
図版3-1-1~4	第1号住居跡出土遺物
図版3-3-1	第3号住居跡出土遺物
図版3-4-1・3・4	第4号住居跡出土遺物
図版4-4-5~7	第4号住所跡出土遺物
図版4-5-1	第5号住居跡出土遺物
図版4-落-1・2	落ち込み跡出土遺物
図版4-外-6	遺構外出土遺物

# 第1章 遺跡をとりまく環境

## 第1節 地理的環境

山梨県は中部地方に位置し、東京・神奈川・静岡・長野・埼玉と接する内陸県である。

山梨県北部には八ヶ岳、秩父山地、東部には燗東山地、南部には富士山、御坂山地、丹沢山地、西部には巨摩山地、南アルプス（赤石山脈）があり、甲府盆地を取り囲んでいる。また秩父山地を水源とする笛吹川と南アルプスの鯉岳を水源とする釜無川が甲府盆地を流れ、それぞれ支流を集めつつ、盆地南西部で合流し富士川となり、駿河湾へと注いでいる。

甲斐市は、甲府盆地の北西部に位置し、南北に細長い形をしている。甲斐市の北側には、茅ヶ岳（1703.5m）、曲岳（1642m）、太刀岡山（1295m）などの山々があり、茅ヶ岳や黒富士（1635m）などの火山活動によって形成された赤坂台地を中心とする丘陵が市の中心部まで延びている。東部には、秩父山地を源流とする荒川が流れ扇状地が広がる。西部には釜無川が流れており、南部は扇状地が広がっている。市内の標高は、最高が金ヶ岳頂上付近の1752m、最低が竜王南保育園付近の264.9mと標高差が1400mを越え、環境の富んだ地域にある。

末法遺跡は、甲斐市の東部を流れる荒川と荒川の支流貫川によってできた扇状地上の微高地にある。周辺には、古墳から平安時代にかけての集落跡・松ノ尾遺跡や弥生から古墳時代にかけての集落跡・金の尾遺跡がある。

末法遺跡第4次調査は、第3次調査の西側約40mの距離に位置している。

## 第2節 周辺遺跡と遺跡の概要（第1・2図）

末法遺跡は、甲府市との境を流れる荒川と、茅ヶ岳や黒富士の火山活動によって形成された台地との間に位置する。

台地には赤坂古台墳群があり、その中にある中鉢塚古墳は、県指定史跡になっている。須恵器や土師器のほか、金環や刀子などが副葬品として確認されている。出土遺物から古墳時代後期（7世紀前半）の川墳であると考えられている。かつてはこの台地に30基程の古墳があったといわれているが、土地開発などによって現在は消滅し、中鉢塚古墳を含め、6基が確認できるのみとなっている。

遺跡の北側には松ノ尾遺跡があり、都市計画街路愛宕町下条線の道路建設に伴って、発掘調査が始まった。ここは、近年特に開発が進んでいる地域で、それに伴って調査が多く行われ、これまでに13回の調査が行われている。松ノ尾遺跡は、平安時代の集落跡で住居跡や溝跡、遺物では坏や皿、甕などとともに2躯の小金銅仏が発見されている。平安時代の小金銅仏の発見は県内では初めてで、全国的にも珍しい。また、古墳時代の住居跡も確認されており、S字状円縁の台付甕、壺、高坏などが多数発見されている。

西側には、金の尾遺跡があり、これまでに7回の調査が行われている。弥生時代の住居跡、方形・円形周溝墓などを確認しており、県内を代表する弥生時代後期の集落跡がある。

報告する末法遺跡は、今回で4回目の調査となり、これまでの調査で古墳時代の住居跡・方形周溝墓・溝跡・土坑跡などの遺構が確認されている。また、古墳時代の遺物のほか縄文・奈良・平安・中世の遺物なども確認されており、人々が連続と生活を営んできた地域である。

今回の調査は、第3次調査の西側約40mの地点で行なわれた。第3次調査では、古墳時代の住居跡6軒、方形周溝墓1基を確認している。（第2図参照）

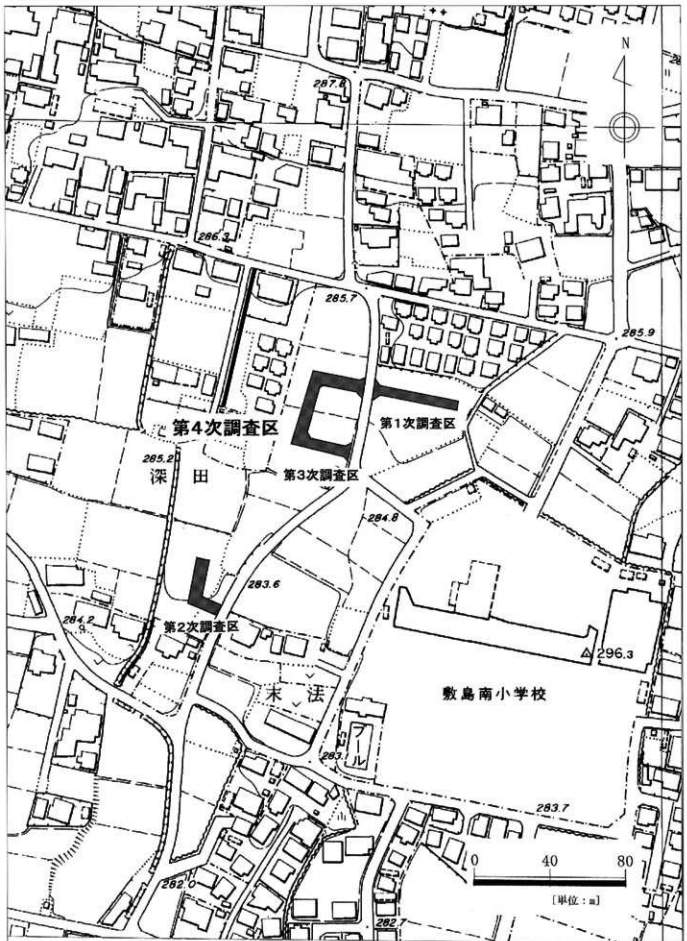
- 参考文献 1977「地形と地質」『双葉町誌』双葉町  
尾藤卓雄 2003「位置」『竜王町史』竜王町  
2004『基本地図帳』株式会社 三宮書店



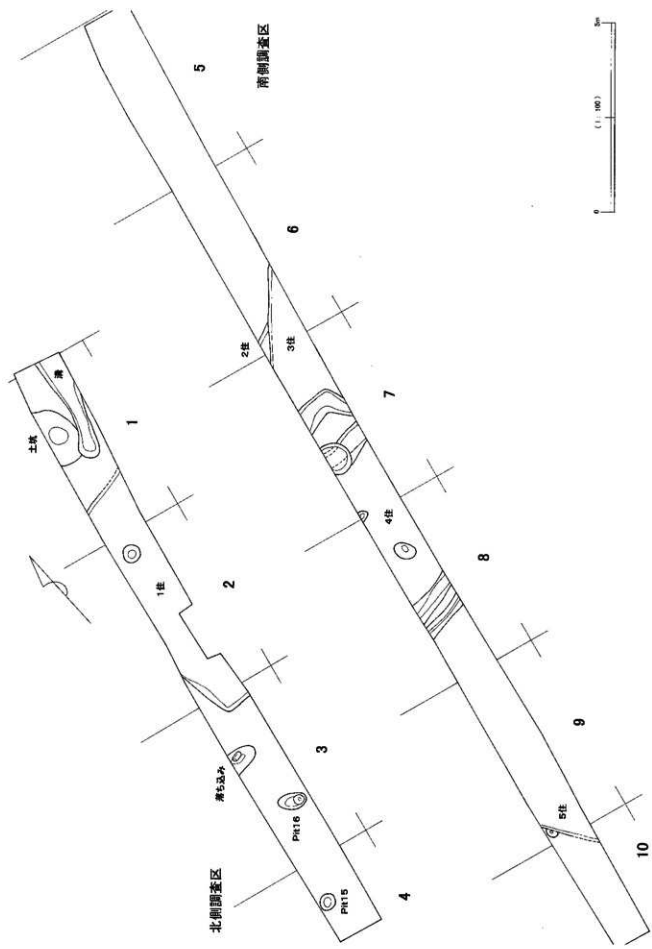
- ① 太田遺跡
- ② 大矢野遺跡
- ③ 石段田遺跡
- ④ 原原遺跡
- ⑤ 山百俣遺跡
- ⑥ 村越遺跡
- ⑦ 手鞠ノ水遺跡
- ⑧ 三輪遺跡
- ⑨ 船ノ尾遺跡
- ⑩ 御田田遺跡
- ⑪ 金の尾遺跡
- 1 北川遺跡
- 2 大矢野遺跡
- 3 上野遺跡
- 4 上野北遺跡
- 5 原原跡
- 6 御原遺跡
- 7 大塚遺跡
- 8 柳心遺跡
- 9 上野北遺跡
- 10 原田西遺跡
- 11 原田北遺跡
- 12 原田遺跡
- 13 大塚遺跡
- 14 大塚古墳
- 15 金ノ尾遺跡
- 16 日ノ尾遺跡
- 17 酒町遺跡
- 18 前田遺跡
- 19 寺前遺跡
- 20 宮地遺跡
- 21 大下集落1遺跡
- 22 大下集落2遺跡
- 23 大下集落3遺跡
- 24 中沢A遺跡
- 25 中沢B遺跡
- 26 中沢C遺跡
- 27 中沢D遺跡
- 28 奥沢A遺跡
- 29 奥沢B遺跡
- 30 原田A遺跡
- 31 原田B遺跡
- 32 原田C遺跡
- 33 古氏神遺跡
- 34 鳥居A遺跡
- 35 鳥居B遺跡
- 36 鳥居C遺跡
- 37 沢集1号古墳
- 38 江ノ原
- 39 宮三ツ塚1号古墳
- 40 宮三ツ塚2号古墳
- 41 ふたん家古墳
- 42 竜三ツ塚2号墳
- 43 竜三ツ塚3号墳
- 44 ニノ尾遺跡
- 45 へび塚古墳
- 46 新町古墳
- 47 八幡遺跡
- 48 氏神西遺跡
- 49 西山1号墳
- 50 西山2号墳
- 51 西山3号墳
- 52 西山遺跡
- 53 沖田遺跡
- 54 元免野遺跡
- 55 東玉遺跡
- 56 稲塚
- 57 ネコ塚
- 58 下河原遺跡
- 59 中河原遺跡
- 60 露巻
- 61 下北遺跡
- 62 伊勢川原遺跡
- 63 中野地遺跡
- 64 鶴原築址

第1図 末法遺跡と周辺の遺跡





第2図 調査区位置図



第3図 調査区全体図

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 調査方法と遺構

今回の調査は、道路拡幅部分のみで、幅約1.3m、長さ約45mと細長い調査区であった。グリッドは調査区に沿って5m間隔に設定し、北側から南に番号を付した。表土剥ぎは、重機で行い、遺物包含層から下は、人力で掘り下げて調査を行った。

遺構の多くは細長い調査区のため、平形などの全体を把握することができなかった。

調査で確認した遺構は、24を数える。(住居跡5軒、溝跡1条、上坑跡1基、落ち込み跡1箇所、ピット16箇所) 遺物の多くは古墳時代のものであった。

### 第2節 基本層位 (第4図)

甲斐市は北高南低の地形を呈している。調査区は南北に長細い形であり、そのため、北側が約40cm程高い地形となっている。

基本層位は、南北2箇所で開催した。層は全部で5層あり、第2層までは耕作による盛土で、第3層から、遺物の出土が確認でき、第4層から遺物の出土とピット群の確認ができた。続く第5層からは古墳時代の住居跡が確認できた。



第4図 基本層位

### 第3節 住居跡

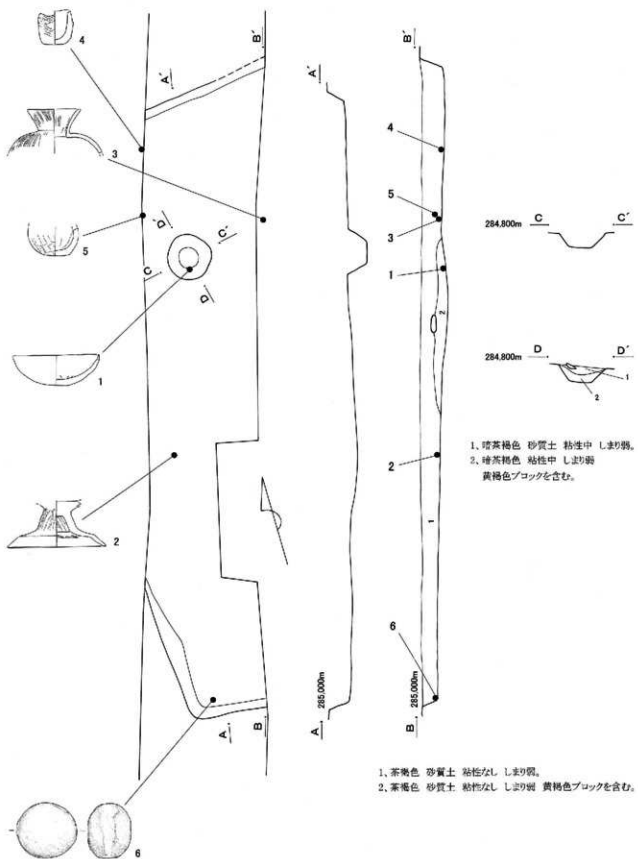
#### 第1号住居跡 (第5・6図、第1表)

位置 1・2・3グリッドに位置する。

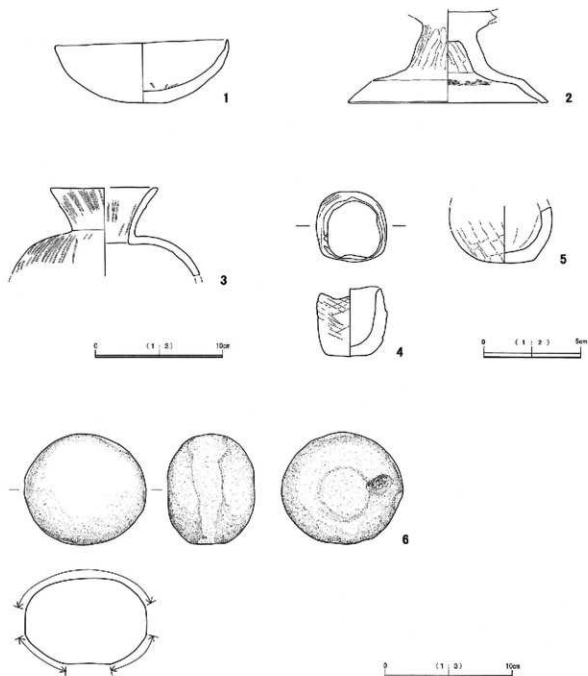
形状 南北に6.4m、東西は確認できた範囲で1.2m、壁は緩やかに立ち上がり、遺構確認面まで、30cmの高さを測る。ピットは1箇所確認でき、規模は直径45cm、深さは18cmを測る。このピットから土師器の坏1が出土している。

遺物 坏や高坏、甕などのほか、ミニチュア土器、石製品が出土した。図示した遺物はすべて、床面直上より確認した。

所見 遺構の全貌を確認する事はできなかったが、出土した遺物をみると、穿孔がなく、脚部の裾が広がる高坏や坏の出土などから、古墳時代中期(5世紀中頃)のものと考えられる。



第5図 第1号住居跡



第6図 第1号住居跡出土遺物

第1表 第1号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	注記番号	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	焼成	文様・特徴	時代
1	4H-1住 P-1	土師器	坏	13.4	2.5	5.0	明茶褐色	長石・金雲母	良好	みこみ部へら痕 外面ナ デ	古墳中期
2	4H-1住 P-4	土師器	高坏		(15.4)	残7.3	明茶褐色	長石・金雲母	良好	脚部内面へら削り・ハケ 目 外面縦方向ミガキ	古墳中期
3	4H-1住 P-2	土師器	壺	8.0		残7.0	明茶褐色	赤色粒子・長石	良好	内面頸部・外面縦方向の ミガキ	古墳中期
4	4H-1住 P-6	土師器	ミニチュア土器	3.0	1.0	3.7	淡茶色	長石	良好	外面ハケ目	
5	4H-1住 P-5	土師器	ミニチュア土器		1.0	残3.0	淡茶色	長石	良好	内外面へら削り	
6	4H-1住 S-1	石製品		最大長	最大幅	最大厚					
				8.9	9.5	6.8					

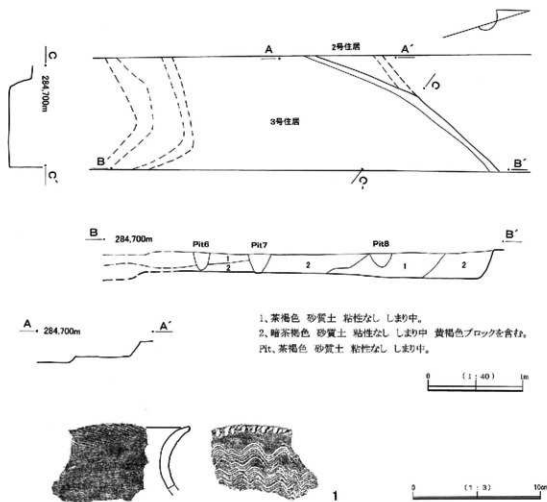
第2・3号住居跡（第7図、第2表）

位置 6・7グリッドに位置する。

形状 第2号住居跡は6グリッドに位置する。第3号住居跡と重複しているため、壁の一部を確認するのみとなった。壁高は約17cmとなっている。第3号住居跡は、6・7グリッドにまたがって位置する。壁高約30cmで規模は、確認できる範囲で南北3.3m、東西1.2mを測る。第4号住居跡と重複している。

遺物 第3号住居跡は第4号住居跡と重複しており、出土遺物は、わずかであった。そのなかで図化できたものは、甕の1点のみであった。

所見 重複しており、それぞれの遺構の全貌を窺うことができなかった。



第7図 第2・3号住居跡・出土遺物

第2表 第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	注記番号	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	焼成	文様・特徴	時代
1	4H-3住 P-1	土師器	甕			残5.0	黒茶色	長石・金雲母	良好	内面ハケ目・ミガキ 外面櫛描波状文 口唇部 刻目	古墳前期

第4号住居跡（第8・9図、第3表）

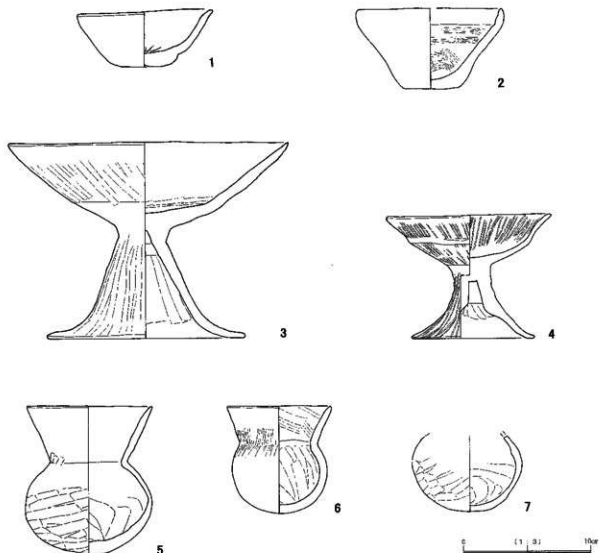
位置 7・8グリッドに位置する。

形状 南北に6.32m、東西は確認された範囲で1.2m、壁高13cmを測る。第3号住居跡と重複しているため、明確な範囲は不明である。第3号住居跡との間に東西方向に幅約60cm、深さ約10cmと同方向に約70cm、深さ約15cmの2条の溝があり、また南側の壁にも幅約50cm、深さ約10cmと幅35cm、深さ約10cmの溝が2条設けられている。住居内には径約50cm、深さ約30cmのピットを1箇所確認している。また、北側の内側の溝の下から土坑を確認している。土坑の規模は調査区に区切られるため全貌は把握できなかったが、長軸90cm、深さ49cmを測る。中からは、埴7が出土している。

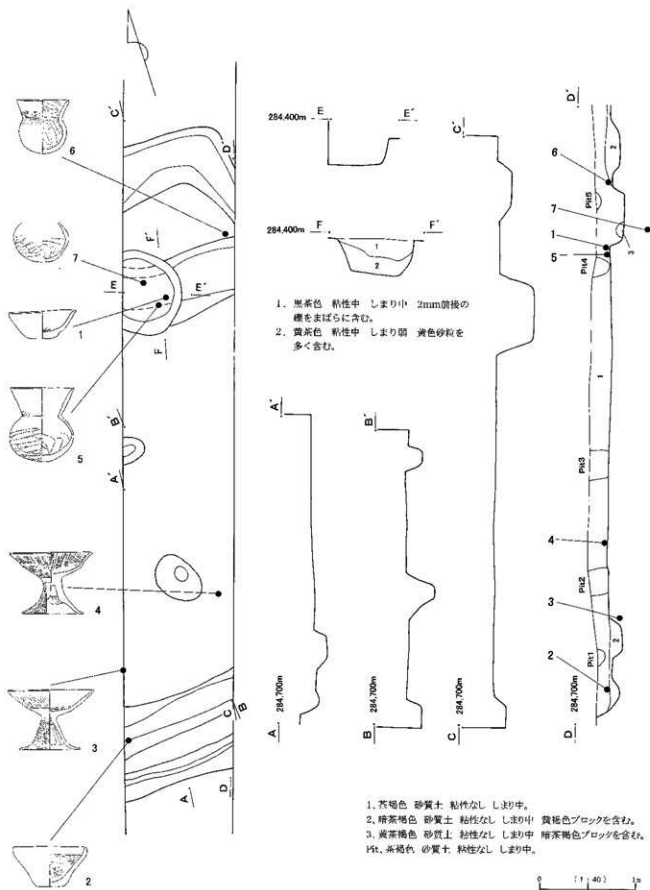
遺物 坏1や高坏4、埴5・6が床面直上より出土している。

所見 住居内の北側に2条、南壁際に2条の溝が確認された。北側2条の溝と南壁際の溝は、南内側の溝と土層が異なる。層位をみると、3本の溝は、床面を覆っていた層とは異なる層であり、3本の溝が埋まった後に、南内側の溝が床とともに埋まったと考えられる。このことから、北側2条の溝と南壁際の溝は、初めにあったものと考えられる。また、北側の溝は、第3号住居跡と重複している。

遺構全体を把握する事はできなかったが、住居内の壁に沿って、隅溝を伴う住居であることがわかる。出土遺物は、坏や坏身に礎をとまなう高坏、埴が出土していることなどから、古墳時代中期初め（4世紀末～5世紀中葉）のものと考えられる。



第8図 第4号住居跡出土遺物



第9図 第4号住居跡



第3表 第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	注記番号	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	焼成	文様・特徴	時代
1	4H-4住 P-7	土師器	坏	10.2	4.0	4.6	明茶褐色	赤色粒子・白色 粒子・金雲母	良好	内面ヘラ痕	古墳中期
2	4H-4住 P-5	土師器	坏	(11.0)	(3.5)	6.4	淡橙色	長石	良好	内面ハケ目	古墳中期
3	4H-4住 P-12	土師器	高坏	21.8	15.2	15.5	淡茶褐色	赤色粒子	良好	内面坏部ハケ目・脚部 ヘラ削り 外面ハケ目	古墳中期
4	4H-4住 P-2	土師器	高坏	12.7	9.4	9.8	橙茶色	赤色粒子	良好	内面坏部・外面縦方向 ミガキ	古墳中期
5	4H-4住 P-6	土師器	埴	9.7	1.0	11.8	茶褐色	小石・赤色粒子	良好	内外面ヘラ削り	古墳中期
6	4H-4住 P-7	土師器	埴	8.1	0.4	8.5	淡茶褐色	赤色粒子・長石	良好	内外面ハケ目	古墳中期
7	4H-4住上 P-1	土師器	埴			1.2	残6.0 明茶褐色	赤色粒子	良好	内面ハケ目 外面ヘラ 削り	古墳中期

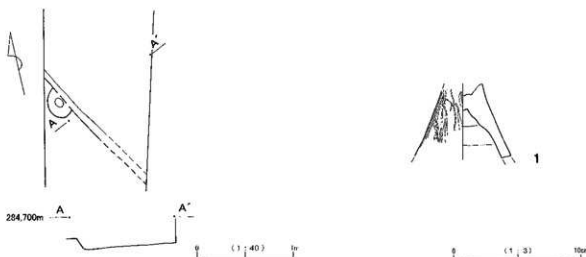
第5号住居跡 (第10図、第4表)

位置 9・10グリッドに位置する。

形状 確認できる範囲で南北90cm、東西1m、壁高は約10cmを測り、わずかに壁が残るのみである。住居であるかの判断は難しいが、周辺の状況をふまえ、住居跡として扱う。

遺物 高坏の脚が出た。

所見 遺構の残りが悪く、遺物もわずかなため時期を特定するのは困難であるが、概ね、古墳時代中期であると考える。



第10図 第5号住居跡・出土遺物

第4表 第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	注記番号	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	焼成	文様・特徴	時代
1	4H-5住・ シクツ3トレ	土師器	高坏			残6.8	茶褐色	長石	良好	内面ヘラ削り 外面縦方 向ミガキ	古墳中期

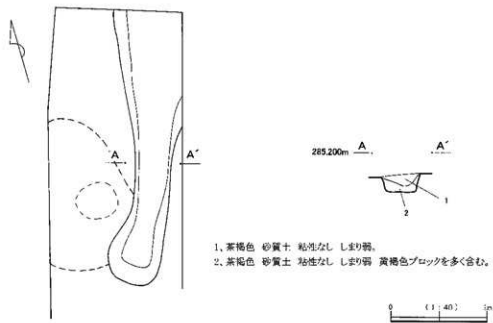
第4節 溝跡 (第11図)

位置 1グリッドに位置する。

形状 長さ2.87m、幅55cm、深さ18cmを測る。調査区の北側に位置し、南北方向に延びる。北側は、調査区外に延びると考えられる。

遺物 図化できるものはなかった。

所見 U字状の断面を持つ溝で、遺物は少なく時期の特定はできなかった。



第11図 溝跡

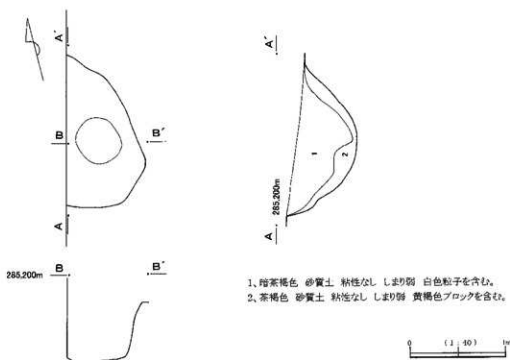
#### 第5節 土坑跡 (第12図)

位置 1グリッドに位置する。

形状 調査区と溝に区切られているため、定かではないが、長軸1.6m、短軸90cm、深さ80cmを測る。

遺物 円化できるものはなかった。

所見 確認できた範囲では、形状は不整形で断面はU字状を呈す。遺物の出土はわずかであり、時期の特定にはいたらなかった。



第12図 土坑跡

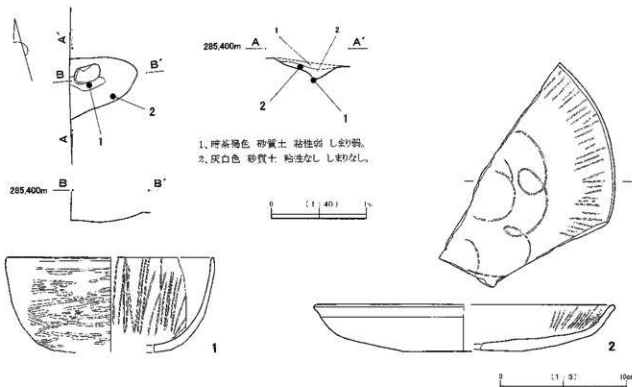
## 第6節 落ち込み跡 (第13図、第5表)

位置 3グリッドに位置する。

形状 調査区東西を横断する形で確認した。確認できる範囲で東西、南北ともに70cm、深さ10cmを測る。調査区西側壁に区切られるため、全貌は確認できなかった。

遺物 奈良時代の坏と盤が出上している。

所見 落ち込み内には30cm前後の円礫が確認され、遺物はこの礫の間にまともって確認された。また、遺物の出上は、周囲とは異なる灰白色砂質土の層からとなっている。



第13図 落ち込み跡・出土遺物

第5表 落ち込み跡出土遺物観察表

図版番号	注記番号	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	焼成	文様・特徴	時代
1	4H-オチ コミP-2	土師器	坏	(16.2)		残7.5	茶褐色	長石・金雲母・ 2mm程の礫	良好	内面縦方向暗文 外面横 方向のミガキ	奈良
2	4H-オチ コミP-1	土師器	盤	(23.2)	(9.0)	3.7	明茶褐色	金雲母・赤色粒子	良好	内面渦巻状・縦方向暗 文	奈良

## 第7節 ビット (第14図、第6表)

16箇所のビットを確認した。

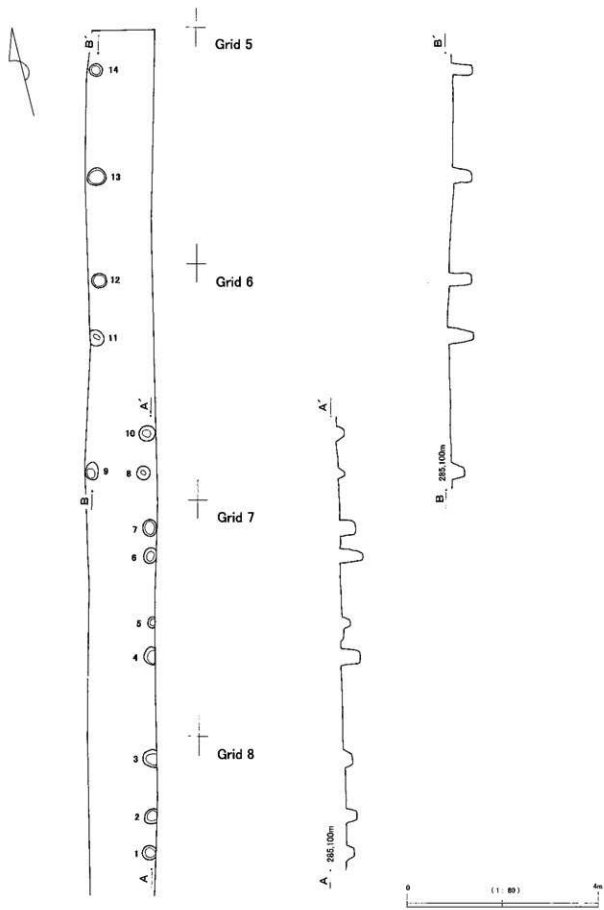
調査区の縁際に並んで確認されたが、規則性は見られない。

遺物を伴うビットは、ビット4・6・8・9・10・11・12・13・14であったが、実測は困難であった。遺物は、概ね古墳時代のものであった。

第6表 ビット一覧表

(単位: cm)

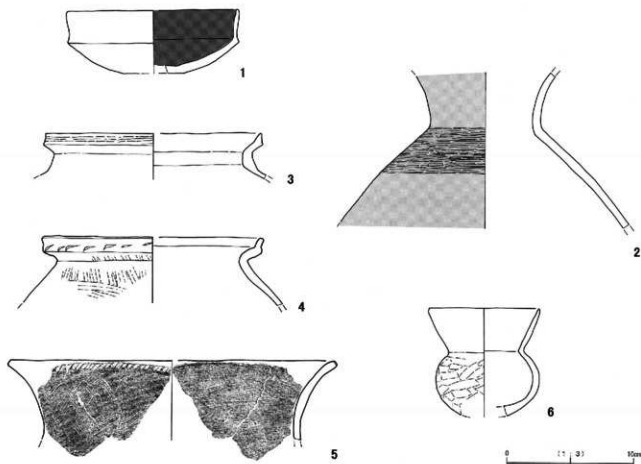
遺構名	長軸	短軸	深さ	遺構名	長軸	短軸	深さ	遺構名	長軸	短軸	深さ	遺構名	長軸	短軸	深さ
ビット1	28	24	19	ビット5	22	8	18	ビット9	35	27	30	ビット13	37	37	40
ビット2	30	20	25	ビット6	35	26	50	ビット10	34	33	18	ビット14	26	26	44
ビット3	37	20	25	ビット7	35	30	37	ビット11	35	27	53	ビット15	40	40	25
ビット4	35	23	47	ビット8	31	25	15	ビット12	30	29	50	ビット16	70	70	15



第14図 ビット配置図

## 第8節 遺構外出土遺物 (第15図、第7表)

遺物番号2・3・4・5は、住居跡が確認された層と同一の基本層位第5層からの出土である。遺構外の出土ではあるが、概ね古墳時代の遺物であり、時代が特定できた住居跡とはほぼ同時期のものであると考えられる。



第15図 遺構外出土遺物

第7表 遺構外出土遺物観察表

図版番号	注記番号	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	焼成	文様・特徴	時代
1	4H-6G	土師器	坏	(13.2)	(4.8)	5.0	明茶褐色	赤色粒子	良好	内面内黒ミガキ 外面ヘラ削り後ミガキ	古墳後期
2	4H-4G P-2	弥生土器	壺			残12.2	淡茶色	長石・赤色粒子・金雲母	良好	外面赤彩 頸部に横線文	弥生後期
3	4H-4G	土師器	台付甕	(16.8)		残3.6	明茶褐色	長石	良好	外面口唇部ハケ目	古墳中期
4	4H-4G	土師器	台付甕	(17.0)		残5.2	茶褐色	長石	良好	外面横方向・縦方向ハケ目	古墳前期
5	4H-4G	土師器	甕	(25.6)		残6.3	暗茶褐色	長石・金雲母	良好	内面横方向ミガキ 外面櫛掻波状文 口唇部刻目	古墳前期
6	4Hシクツ 2トレ	土師器	埴	8.6		残8.5	茶褐色	赤色粒子・長石	良好	外面ヘラ削り	古墳中期

## 第3章 まとめ

末法遺跡は荒川右岸の南北に延びる微高地上に営まれた集落跡である。今次調査も含め4回にわたって発掘調査が実施され、それぞれ大きな成果が得られている。

末法遺跡が所在する敷島地区南部は荒川と登美、赤坂台地との間に南北に延びる微高地が2箇所あることがこれまでの発掘調査によって確認されている。末法遺跡は東側（荒川側）微高地の南端に位置し、北側には古墳時代後期から平安時代の集落遺跡である松ノ尾遺跡が隣接する。

今次調査では、弥生時代後期の壺片や奈良時代前期の環の出土を見たが、その中心は古墳時代前半に展開する集落跡である。

### 弥生時代

遺構は確認されなかったが、4グリッド中から頭部に櫛描横線文を有す大型壺片が出土している。頭部から体部にかけてのもので、体部に赤彩が施される。弥生後期、山梨県土器編年の弥生5期・5A-[2]期（金の尾Ⅱ式）に属する。

遺跡西方約400mには弥生時代後期の環塚集落「金の尾遺跡」が所在し、西側（台地側）微高地上に営まれた集落跡である。甲府盆地全体に中部高地型の櫛描文系土器が広がりを見せる時期で、金の尾遺跡出土土器は標識資料となっている。

末法遺跡からは、過去の調査において当該期の土器片が出土している。遺構は確認されていないが遺跡内には弥生時代後期の集落跡の存在は十分に考えられよう。また二つの微高地の先端部に集落が営まれていた可能性が高いことは、集落形成や弥生時代から古墳時代への移行期の様相を考える上でも重要である。

### 古墳時代

今次調査で確認された住居跡は5軒であり、2号住居跡を除き古墳時代に位置づけられるものである。

4号住居跡からは、埴、高坏など比較的まとまった土器資料が得られた。土器形式から本県土器編年の古墳Ⅲ期（4世紀末）からⅤ期（5世紀中葉）に該当すると考えられる。この4号住居跡に切られるかたちで3号住居跡がある。まとまった遺物は出土しなかったが、3世紀末から4世紀初頭の口唇部に刻目、肩部に櫛描波状文をもつ壺片（第7図-1）が出土している。この1点のみで年代を決めることは難しいが、遺構の切り合い関係を考慮すると当該期に比定しておきたい。2号住居跡は、この3号住居跡に切られるかたちで存在したことから3号住居跡よりも先行する年代が与えられるが、調査範囲や確認された遺構残存状況の関係から年代を確定することはできなかった。1号住居跡は今次調査で発見された住居跡の中で北壁、南西壁が確認されていることから唯一平面プランが推定できるものである。出土遺物から古墳時代中期とした。5号住居跡については出土遺物が僅少であり、図化可能な遺物は高坏の脚部のみである。遺構確認範囲が狭小であるため明確な時代確定には至っていないが、出土遺物、周辺の状況から古墳時代中期頃とした。

### 奈良時代・中世以降

本遺跡からはこれまでに当該期の遺構は確認されていないが遺構外遺物としては8世紀代の須志器蓋、環、15～16世紀の上師質小皿や陶磁器などが出土している。今次調査では本県土器編年の奈良・平安Ⅱ期にあたる上師器環、盤が落ち込み跡から出土している。本遺跡の性格を明確にすることは難しいが、当該期に属す遺物が遺構に伴って発見されたことは本地域の歴史を明確にする上でも貴重な手がかりとなる。また上層で確認されたピット群については今後周辺での類似資料の集積をまわって詳細な検討を行ってきたい。

末法遺跡からは、これまでの調査で、古墳時代前期から中期までの住居跡や周溝帯が発見されており、今次調査においても当該期の住居跡を確認した。したがって現時点での本遺跡の年代は古墳時代前、中期を主体とする集落遺跡であり、その創始は弥生時代後期に遡る可能性が高いと言える。

### 参考文献

- 中山誠二 1999「弥生時代の編年」『山梨県史 資料編2 原始・古代2』 山梨県  
坂本美夫 1999「古墳時代の編年」『山梨県史 資料編2 原始・古代2』 山梨県  
三輪孝幸 他 2004『末法遺跡Ⅲ』 敷島町教育委員会

# 写真図版



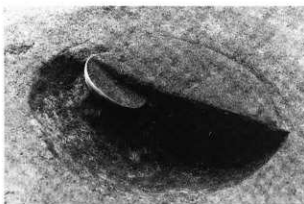
1 北側調査区全景



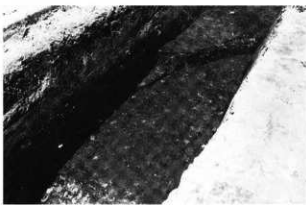
2 南側調査区全景



3 第1号住居跡



4 第1号住居跡遺物出土状況



5 第2・3号住居跡



6 第4号住居跡





1 第4号住居跡遺物出土状況



2 第4号住居跡遺物出土状況



3 第5号住居跡



4 溝跡



5 土坑跡



6 落ち込み跡



7 落ち込み跡遺物出土状況



8 ビット全景





4-5



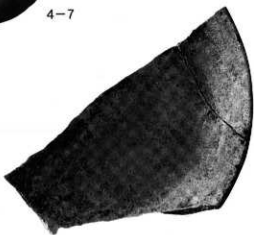
4-6



4-7



5-1



落-1



落-2



外-6

## 報 告 書 抄 録

ふりがな まっぼういせき								
書 名 末 法 遺 跡 IV								
副 書 名 宅地造成工事に伴う古墳時代・奈良時代遺跡の調査報告書								
巻 次								
シリーズ名 甲斐市文化財調査報告書								
シリーズ番号 9								
編 著 者 名 人 嵩 正 之 ・ 須 長 愛 子								
編 集 機 関 甲斐市教育委員会								
所 在 地 〒400-0105 山梨県甲斐市下今井236-2								
発 行 年 月 日 平成19年〔西暦2007年〕3月28日								
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		東経	北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
末 法 遺 跡	山梨県 甲斐市 大下条 399-1 外	19210	敷-5	138度31 分39秒	35度40 分24秒	平成18年 4月13日 ~ 平成18年 5月2日	150㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
末 法 遺 跡	集落跡	古墳時代	住居跡 土坑跡 溝跡	土師器	奈良時代の盤山土			

### 甲斐市文化財調査報告書第9集

## 末 法 遺 跡 IV

発行日	平成19年(2007)3月28日
発 行	甲斐市教育委員会
住 所	〒400-0105 山梨県甲斐市下今井236番地2
電 話	0551-20-3658
FAX	0551-20-3659
印 刷	株式会社 峽南堂印刷所

